まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第５６号（令和３年１１月１５日）
読者数：６６５名（募集中）
ﾒｰﾙ：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
HP：https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

ポスト・コロナを目指して乗り越えていこう！

○平和記念資料館東館
玄関ホールの壁画

○ことしも８・１５
講演会

○広島市基町地区再開発
計画イメージ図

○大イノコ祭り

目　次

○巻頭言：「広島スタンダード」の一つの提案
……広島アイデアコンペ実行委員会　瀧口信二
○ひろしまのまちづくりの動き
・広島市基町地区再開発計画概要
・広島市中央公園内施設の適正再配置検討
○広島の復興の軌跡・人物編：広島市復興審議会：編集委員　石丸紀興
○ほっとコーナー：おじいちゃんが残してくれたもの ……読者　六百田裕子
○Hihukusho ラジオ報告：ゲスト 弓狩匡純（ノンフィクション作家）
○「ことしも８・１５」(20 周年記念）報告
○“私と、私のまわりにいる人たち”のまちづくり：アーチスト　石原悠一
○お知らせ：第３回広島市平和祭再現劇のご案内
○編集後記：一人ひとりに物語がある ……編集委員　前岡智之

□ 巻頭言

「広島スタンダード」の一つの提案

～広島の公共建築に「平和のための１％」を～

広島アイデアコンペ実行委員会　瀧口信二

「広島スタンダード」を提唱しているのは、今号の Hihukusho ラジオに登場しているノンフィクション作家弓狩匡純氏である。広島の「平和」というコンテンツを最大限生かして国内外にアピールしていこうという。その言葉に触発されて、これまで考えていたことの一端を紹介したい。

〈建築とアート〉

20 世紀の近代建築の巨匠の一人ル・コルビュジエは建築家であると同時に芸術家であったので、彼の設計する建築はアートを内包したものであった。そのコルビュジエを師とした丹下健三も積極的にイサム・ノグチや岡本太郎などの芸術家と協働して多くの建築を残している。

広島平和記念公園の設計では慰霊碑の設計を日系米国人の彫刻家イサム・ノグチに依頼して設計も完了したが、原爆を落とした米国人に対する反発があり、実現しなかった。その代わりではないが、丹下の推薦で平和大橋と西平和大橋の欄干をイサム・ノグチが設計し、好評を得ている。

ノグチは「平和大橋は生を象徴する太陽の形“to live”を表し、西平和大橋は犠牲者が黄泉の国へ船出する死の象徴“to die”として船の竜骨をかたどった」という。

〈1%フォー・アート〉

50 年ぐらい前、高度経済成長期の頃、建築費の数パーセントをアートに投入しようという動きがあったが、いつの間にか立ち消えたようだ。しかし、今でも公共建築の費用の 1%をその建築に関連・付随する芸術・アートのために支出しようという「1%フォー・アート」という考え方がある。

元々は 1935 年に大恐慌時のアメリカで仕事のないアーチストに対する救援策「1%for Art」として生まれた制度である。フランスでは「芸術のための 1%」という呼び名で 1951 年から学校建築に対して導入され、幼少期から芸術に触れる環境が整えられているという。

〈ひろしま２０４５ピース＆クリエイト〉

広島では平岡敬市長時代に被爆 100 周年の 2045 年を目指して、「ひろしま２０４５ピース＆クリエイト」という制度を作った。優れたデザイン力を持つ建築家を採用して公共建築を設計し、個性的で魅力ある美しいまちを創造しようという試みである。これも市長が交代して立ち消えてしまったが、今もその制度で誕生した公共建築は高い評価を受けている。

その一つ、谷口吉生設計の広島市環境局中（清掃）工場は丹下の平和の軸線を意識したガラス通路の通り抜けを設け、海に開かれた展望デッキはデートスポットとなり、映画のシーンにもよく登場する。

〈広島スタンダード建築〉

弓狩氏が提案した「広島スタンダード」は、広島発の商品やサービスに平和をテーマにした何か付加価値を付けたものを県や市が評価・認定して世界市場に売り出そうというものだ。結果として広島から世界に平和を発信することができる。

そこで私が長年携わってきた公共建築にそれが適用できないものかと考えてみた。

広島市内の公共建築に「平和のための 1%」という呼び名で、建築費用の 1%を平和をアピールするために支出することを義務付け、その成果を評価して「広島スタンダード建築」として認定していく。

例えば、人の目につきやすい玄関ホール周りに平和をテーマにした彫刻や絵画を置くことは今でも時々目にすることができる。平和記念資料館東館は丹下事務所の設計だが、玄関ホールと地下 1 階ホールの壁面に平山郁夫の絵をベースにした大きな陶片タイル画が飾られている。

1 階の「平和のキャラバン・東（太陽）」は穏やかで明るい印象を与え、地下 1 階の「広島生変図」は鬼の形相を示し、首を垂れて反省を促す力がある。

〈広島平和記念都市建設法の精神を具現化〉

この制度を新築だけでなく、既存施設にも義務付けることにより、広島の公共建築に行けば、必ず何かのアピールを受け、日常的に平和を考えるきっかけを作ることができるのではないか。

日常にありふれていればマンネリ化して感動しなくなるのでは？と反論されそうだが、新しく足を運んだ外来者の目に留まれば、何かのインスピレーションを与えることができであろう。

公共建築にこの制度が浸透すれば、デパートや劇場など人の出入りの多い民間の建築にも広まっていくであろう。広島の建築が広島スタンダードにあふれるようになった街の姿を想像してほしい。

弓狩氏が提唱するように、建築以外にも商品やサービスまで広島スタンダードが浸透すれば、自ずと「世界平和のメッカ」として広島が位置付けられるであろう。

正にそれは広島平和記念都市建設法の精神を具現化したものとなる。

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島市基町地区再開発計画概要！

高層棟のイメージ図

（朝日新聞サイトより）

広島市と広島商工会議所は８月に現在の商工会議所ビルと市営基町駐車場を財産交換している。そして９月末、基町駐車場一帯の再開発事業について市と開発事業者は概要を発表した。

事業者は、都市再生機構、地権者の中国電力ネットワーク、朝日新聞社、朝日ビルディング、広島市及び広島商工会議所の６者。

再開発ビルは高層ビル棟、その北側に５階建ての変電所棟、その西側に地上５階地下１階建ての市営駐輪場棟の３棟。

高層棟は地上 31 階地下１階建ての高さ約 160ｍで、紙屋町・八丁堀地区ではリーガロイヤルホテル広島を抜いて最高の高さとなる。

低層部に商工会議所や店舗・駐車場が入り、中層部に事務所、高層部に高級ホテルが入居。国内外からの観光及びビジネス客が集まる拠点を目指す。デザインも中高層階の壁面を道路からセットバックさせて環境に配慮。

今年度中に都市計画を決定し、23 年度から着工し、高層棟と変電所棟は 27 年度、市営駐輪場棟は 29 年度完成予定。

近接する八丁堀地区にも再開発事業が計画されており、広島都心の新たな顔として生まれ変わろうとしている。

② 広島市中央公園内施設の適正再配置検討！

広島市は中央公園内の７施設について集約や移転を検討中で、９月の市議会都市活性化対策特別委員会に報告。関係団体や議会の意見を踏まえて来年２月ごろに具体案を示し、４月以降に可能な施設から順次進めるという。検討案は以下の通り。

（中国新聞 2021.9.1 より）

中央図書館（1974 年築）と映像文化ライブラリー（1982 年築）及びこども図書館（1980 年築）を集約して公園外も含めて移転を検討。移転先は JR 広島駅周辺を候補地としている。

現在のこども文化科学館（1980 年築）は耐震化と長寿命化を図った上で、こども図書館が抜けた後に青少年センター（1966 年築）を移し、集約・複合化を図る。

ファミリープール（1979 年築）は公園外への移転や廃止を検討。中国庭園「渝華園」（1992 年築）は現在の中央図書館の北側に移転・整備。中央図書館の移転跡地には音楽ホールなどの文化芸術施設の整備を検討。

問題点　渝華園を現在の中央図書館北側へ移転するのは周辺の環境とマッチしないし、中央図書館の移転跡地に文化芸術施設を整備するには敷地が狭すぎる。サッカースタジアムの決定も都市計画や建築計画的に問題があり、市はもっと専門家の意見を聞くべきであった。

○ *広島の復興の軌跡・人物編（第２８回）*

～広島市復興審議会：人物ではないが当時の意欲的な提案者が広島復興に対して次々と提案することができた制度・組織体～

はじめに

今回は特定の個人ではなく、組織体あるいは制度といってもよいシステムをとりあげる。それは広島市復興審議会と呼ばれる制度である。被爆から間もない、すなわち戦後間もない時期、昭和２１年１月という時期に広島市復興局が設立され、それに引き続いて２月に木原七郎市長の諮問機関として設置されたものであ

る。この審議会において委員のみならず特別に招かれた人を含めて多くの提案者が広島復興に対してそれぞれの構想を提案した。その様はさながら復興構想の百花繚乱、溢れんばかりの構想のオンパレードであった。その一端を紹介してみよう。

１．松田重次郎による地盤嵩上げ構想の提案

復興審議会の議事録資料

広島新史資料編Ⅱ（復興編）によると，　昭和２１年２月２５日に第１回復興審議会が始まり、藤田若水元市長が審議会委員長に選出され、早速審議が始まった。最初に提案されたのが松田重次郎委員から、洪水に悩まされた土地を嵩上げするというものであった。この時はこれについて議論が進まなかったが、第３回において改めて提案され、「*広島は永らく洪水に悩まされてきた。戦災によって生じた瓦礫を埋め立てすれば地盤が嵩上げされるのではないか。また道路を高くして道路の内側を大きなトンネルにして上下水道、電線等を入れたら美観も損せず修理も容易であると思うがいかがでしょうか*」と共同溝の構想を提案している。松田委員はさらに道路嵩上げの経費的見通しを述べ合意を迫っている。しかし審議としては進まず、今後の課題とされた。浜井信三は、後にその著「原爆市長」において「名案“全市埋立”お流れ」とこの件を報告している。

復興審議会では時々面白い意見が飛び出した。その一つ、焼け跡全体を埋めて地揚げしたらどんなものであろう、というものがあった。広島市は太田川のデルタを干拓して延びてきた町で、満潮時には、土地の方が１・５メートルから２メートルも水位より低くなる。これが豪雨のとき、各所で床下、床上の浸水をきたす根本的な原因となっている。そこであまり家が建っていない今の内に、サンド・ポンプで全市を埋めてしまってはという意見である。

「*しごく名案であるが、いざ現実の問題となると困難であった。まず工事の財源がない。相手が大部分私有地とあっては、勝手に埋め立ててしまうわけにはいかない。全市を埋め立ててしまえば、既設の下水管、水道管をはじめ、地下埋設物を一応放棄して、新しくつくりなおさなければならない。やりたいことだが、残念ながらとうてい手が出せないことなので、あきらめざるを得なかった。*」

と、的確なコメントと共に結論を論じている。まさに的を得た構想であったが、採用されなかったのは、莫大な工費と工期には勝てないのであった。

２．松村光麿顧問案や渡辺滋案の発表

この審議会で際立った特徴は、松村光麿といったいわば元戦災復興院次長というプロ級の計画顧問に審議の基本的方向の指示を受けたり、一方では渡辺滋という民間の発想力豊かな提案者からの案も詳しく拝聴したり、型破りの審議会となったことである。

松村は、民力重視の復興計画でなければならないと指示し、多少の遅延は問題ではなく、市民の輿論を重視すべしという基本的な立場を説明したのであった。

渡辺は審議会の委員ではなかったが、弁護士とされ、東京ではとバス観光の提案者ともいわれ、ある時期、特別待遇で審議会に強烈な構想吹聴者として機能した。広島新史都市文化編でも、広島新史資料編（復興編）でも明らかにされているが、第２回審議会で２０件近くの構想を、昭和２１年４月には一時期「広島市復興局嘱託」とされる立場からさらに１１件も追加提案しているのである。これらすべてに言及することはできないが、たとえば中央停車場（すなわち広島駅）を白島に、都市の性格は綜合都市に、鷹野橋付近を政治の中心に、道路は東西は直線に南北はカーブをもたせて電線等の架線はすべて地下に、東練兵場は将来利用に備え災害時の避難場所に、人口は３０万か４０万人くらいに、といったように具体的なものから特徴性に至る多くの提案を含めていた。特に目立つ特徴は、景観的な発想で、例えば各河川は河岸、橋梁共に各自異なった特徴ある統一美を実現すると言い、市内の敷地境界は生垣を主体とし、川や海に面する敷地は都に奏すこと、などが提示されている。

３．復興審議会の役割と意味

既述したジョン・Ｄ・モンゴメリーの旧産業奨励館の保存や被爆資料の収集や研究（おそらく展示も）についての提案もこの審議会でなされたのであった。審議会でモンゴメリーの構想、特に戦争記念物の保存や記念公園の建設などが提案されたことは大きなインパクトを与えたであろう。

更に審議会の役割が終わりに近い昭和２３年段階で、丹下建三グループが土地利用構想案として広島の基本的枠組みや構造について提案したことも決定的な意味を有している。もちろんこの段階では平和記念公園の構想に到達していないが、法定計画という都市基盤の復興計画に対して、いわば空間的な都市デザイン（アーバンデザイン）的発想へのヒントを与え、一石を投じたのであった。丹下の構想、復興計画に対して果た

した役割、その後の継承と断絶といったことついては稿を改めるので、ここでは打ち止める。

復興審議会は、制度上明確に役割付けされた組織ではなく、自由勝手に議論が進められたといえよう。このような制度はいまだかつて存在したことはなかろう。総合計画に関わる審議会はあるが、それほど開かれた組織でなく審議された内容が市民にインパクトを与えているわけではなかろう。今までの特定の提案で大きな役割を果したものが開示されたことはないし、逆に採用されないにしても画期的な構想が紹介されることもないであろう。要するに自由な構想は役割を与えられておらず、第一現在は構想力も萎えているのではなかろうか、東日本大震災の復興構想で強烈に議論したという話を聞かない。せいぜい高潮堤防の高さ、設置の是非程度が論争されたので、より基本的な問題はあったのか、なかったのかさえ不明である。

要するに現在は、制度上はいろいろできるようになっているが、実質的に構想を記録したり、構想を発表したりする場も限られており、そもそも発想力に限界がある。かつての貧しい社会でも逆に構想の豊かさや検討の場や仕組みを促進したのかとさえ思えるのである。これに反論があるなら、そのような実質的な場で提案しようとしたり、そのような場を構築したりしてみていただきたい。私自身は東日本大震災復興に関連して復興庁に自由に議論する場（仙台と東京で交互に検討会・発表の場）を構築するよう進言したが一蹴されたのである。

（編集委員　石丸紀興）

注：広島市復興審議会は昭和２１年２月１５日に設立、２２回開催して昭和２３年３月解散。

参考文献：①.広島市編「広島新史資料編Ⅱ（復興編）」（広島市発行、昭和 57 年）、②広島市編「広島新史都市文化編」（広島市発行、昭和 58 年）、③広島都市生活研究会編「広島被爆 40 年史都市の復興」（広島市企画調整局発行、昭和６０年）

□ ほっとコーナー

おじいちゃんが残してくれたもの

読者　六百田裕子

2016 年 11 月、自宅の庭で「六の庭ばざ～る」を開催しました。当時、「もとまち自遊ひろば」という、中央公園でのこどもの遊び場開催に関わっていた私は、自分の住む地域で遊び場をしたいと思っていました。どこか良い場所はないかな、一緒にやりたいという人はいないかな、と数年前から探していました。良さそうな場所はあっても、火が使えない、トイレがない、自宅から遠い。公共の場所を使うとなると、許可申請の手続きやら何やらと面倒くさそう。こどものいない私には地域の子育て世代の繋がりはなく、「こどもの遊び場をやりたい」だけでは、なかなか仲間は集まりませんでした。そこで、近所に住むハンドメイド好きの同級生に声をかけました。こうして、【こどもの遊びと三世代てづくり市「六の庭ばざ～る」】をとりあえず庭でやってみよう！ということになりました。

ハンドメイドや遊びのブース

当日は、ハンドメイドや庭カフェ、ドングリ工作等、近所や町内の方々に協力いただきました。同級生の子育て世代の口コミで、予想を超えてたくさんの人が遊びに来てくれました。一日中、過ごす人もいたくらい大人もこどもも遊んでいたのが印象的でした。大人が遊べば、その隙間を縫うようにしてこどもも遊ぶ。いつの間にかそこには、こどもの遊び場がありました。

秋・春・秋と 3 回続いた「六の庭ばざ～る」でしたが、自宅庭でやるというのはなかなか大変なもので、①前準備と後片付けの負担大　②倉庫の修繕が必要という理由で、一旦ストップすることにしました。そして、ハンドメイドや遊びのブースは、町主催の祭りへ「六の庭」として出店することになりました。

倉庫の修繕を終えた 2019 年からは、小さなコミュニティの集いの場所となれるよう、集会所のない私たちの町内会の会議の場所として使ったり、花見や夜警で集まったり、こども会と共催で「夏休みの宿題をやっつける会」をしました。

コロナ禍の今、地域の繋がりが薄れ、引きこもりがちになっているという声を聞きます。さらに、今年からこども会がなくなりました。そんな中、多世代の繋がりを引継いでいきたいと、公共の小さな緑地スペースに町内会でさつま芋を植えました。この秋、「さつま芋収穫祭と亥の子祭り(神事)」を計画中です。花が大好きだったおじいちゃんが残してくれた庭。小さなコミュニティの花が咲き始めています。

六の庭

○「Hihukusho ラジオ（第２７回）2021.7.30（＊リンク参照）」報告

昨年の６月より月２回、１時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「Hihukusho ラジオ（＊リンク参照）」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第 27 回目の弓狩匡純氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター　：土屋時子（広島文学資料保存の会代表）
ゲスト　　：弓狩匡純（ノンフィクション作家）
インタビュアー：瀬戸麻由（シンガーソングライター）

―自己紹介―

1959 年兵庫県宝塚市生まれ。中学校の時に鎌倉市へ移転。高校卒業後、アメリカの大学に留学し、卒業後帰国。20 代・30 代は主に国際報道のため世界 50 ヶ国以上の国々を訪れ、40 代からは書籍の方に重きを置き、調査報道を中心に行っている。

1980 年代後半、アジアで最初に訪問したベトナム、カンボジアはまだ鎖国状態にあったが、学生時代を過ごした超大国アメリカとの落差を感じ、世界の広さと奥行きの深さを学ぶ。

最初に執筆したのは 87 か国の国歌の歴史と伝統を綴った『国のうた』である。日本の国歌「君が代」とは異なり、反政府デモでも歌われるなど、国民に親しまれている歌が多い。

―広島を取材するきっかけ―

2011 年の東日本大震災の時、宮城県の石巻を取材。瓦礫の山を前にして、被災者の慟哭を聞く。半年後にはマスメディアが「復興」という言葉を使い始め、空虚さを感じ、なぜか広島が脳裏に浮かぶ。原爆投下により焦土と化した広島が、どのようにして不死鳥のごとく復興して、世界がうらやむような近代都市になったのかを知りたいと思った。

被爆時のことは文学作品など書籍が沢山あるが、その後の復興の記録はほとんど残されていない。7 年前から広島に何十回も足を運び、数年かけて執筆したのが、『平和の栖 広島から続く道の先に（＊リンク参照）』（2019 年出版）である。

同年、基町高校の創造表現コースの生徒たちが被爆者から直接話を聞きながら原爆の絵を描いていく姿を追った『平和のバトン 広島の高校生たちが描いた 8 月 6 日の記憶』も出版。

今の被爆者が 10 代の被爆体験を話し、それを 10 代の高校生が油絵にし、青少年読書感想文全国コンクールの課題図書に選ばれた『平和のバトン』を今の中学・高校生が読む。そこに、時空を超えた同世代のトライアングルを形作る共通言語があり、今でしか書けなかった作品である。

若い人たちの本音として、今の平和学習はテンプレート（定型）化して、模範解答を学ぶだけで終わっている。もう少しコミュニケーション（対話）がしたいと言う意見が多い。

―広島の目指すべき道―

広島に限らず地方都市はこれから人口が減少し、経済規模も縮小していくなか、生き残る道を探っている。広島の名産品などを全国の市場に売り込む方策がとられているが、他でも同じことをやっている。

広島ならではのコンテンツ、”売り”は「平和」であり、唯一無二の強みである。平和とは何かを一から考え直して、広島の発展のために何ができるかという視点があっていい。

例えば、県や市が商品やサービスに「平和」に関連する要素を織り込んだものを「**広島スタンダード**」と認定し、それを国際平和文化都市のフラッグシップ商品として世界のマーケットに積極的に売り込んではどうか。

―被服支廠との出会い―

『平和の栖』の取材過程で 5 年位前に被服支廠を知り、訪問する。その広大な建物に圧倒されながらも、野ざらし状態で放置されていることにショックを受ける。

近視眼的に判断するのではなく、50 年後、100 年後の広島県人、日本人、世界の人々がどのように捉えるかを考えて再利用法を考えるべきであり、貴重な被爆建物として基本的に全

棟保存すべきである。

平和記念資料館の前館長志賀さんは、これからは「モノに語らせる」しかないと言っている。被爆体験を語れる人が年々少なくなっていけば、伝えることができるのはモノしか無くなっていく。そういう意味で被服支廠を解体撤去することはあり得ない。問題はどのように残すかだ。

―被服支廠の保存について―

現在、保存する理由として、①軍都廣島の加害の歴史を残す、②建築工学的に貴重、③大規模な被爆建物、④被爆者の救護所、などが挙げられているが、どれも負の遺産としての扱いである。

負の遺産を強調するだけでは万人に訴える力が弱い。県民の8割は被服支廠のことに無関心であるため、このままでは10年後には1棟だけ保存すればよいという当初の案に戻る可能性が極めて高い。50年後の人々にも納得してもらえるように、運営・管理において自立できる有効な活用策をしっかり練り、今のうちに楔を打っておかなければならない。

―県が方針転換した理由―

県が全棟保存に転換した理由は、耐震化に掛かる費用が半減したこと及び重要文化財に指定される可能性があり、指定されれば国から補助金が出ることにあり、コスト的な要因が主である。

重要文化財の指定も技術的に可能というだけで、実際に指定されるためのハードルは高い。旧日銀広島支店も指定を目指していたが、20年近く動きがない。

県も将来とも全面的に保存することを確約したわけではなく、更に危機感をもって臨まなければならない。

―被服支廠の活用私案―

もし自分が被爆死没者なら、被服支廠が墓碑として拝まれるよりも、子供たちの笑顔があふれ、海外から訪れた人たちが楽しめる場、「平和」を実感できる場となってくれた方が個人的にはうれしい。それは尊い命を失った人たちの供養にもなると思う。

私案として、東京に集中している国連関連機関やICANのような平和関連のNGOをここに招聘してはどうか。被服支廠の外観と内部の主要構造部は残しながらもオフィスに模様替えする。被爆都市・広島ならば移転しても良いという組織は多いと思う。

徹底的に「平和」というコンテンツを追求して、負の遺産を正の遺産に変えていけば、世界平和のセンターとして広島の新たなアイデンティティとなる。今後の広島を考える上で、一つの試金石となるだろう。

守りの姿勢ではなく、積極的に国際平和文化都市を国内外へアピールしていくべきである。

―今後の取り組みについて―

まずプロジェクトチームを作り、被服支廠とは何かを学び、何を残し、何を活用するかを議論する。メンバーは多彩な人を集め、地元の財界や政治家も加え、若い人の突飛な発想もあって良い。いろいろなアイデアから現実的な提案に収れんさせていく。

大事なのは、市民のコンセンサスを得ながら、ムーブメントにしていくことだ。

＊コメント＊

広島生まれ・育ちではないから客観的に見ることができると言うが、確かに広島愛に満ちた第三者的な立場から数々の参考にすべき提案がなされている。特に、「広島スタンダード」は興味深く、今号の巻頭言のテーマに選ばせてもらった。

（編集委員　瀧口信二）

参考資料

弓狩匡純さんホームページ：https://japanews.co.jp/concrete5/inde...

弓狩匡純さんブログ：https://japanews.co.jp/concrete5/inde...

これぞ広島市の生きる道 その2 （2020年10月1日付）（＊リンク参照）より抜粋

- “Hiroshima Standard for Peace”といったコンセプトは、欧米では必ずや尊敬の念を持って受け入れられます。
- “広島スタンダード”は、単なる一地方都市の起死回生ソリューションといったちっぽけな枠組みに押し留めることなく、国際的なビジネスモデルとして大々的に打ち出すべきでしょう。広島市には、他にはないコンテンツがあります。

8月6日から8・15へ（言葉を紡いで）

○「ことしも8・15」（20周年記念）報告

～反戦・原爆詩を朗読する市民の広場～

メインゲスト：堀川惠子氏（ノンフィクション作家）

2002年から「8・15のつどい」を企画し、8月15日の意味を問い直してきた。昨年は旧陸軍被服支廠の「赤レンガ倉庫」の前で屋外の「つどい」をし、被害と加害の広島を考えた。今回は、「暁の宇品」の著者・堀川惠子さんを迎え、改めて軍都広島を考える。

主催：広島文学資料保存の会・広島花幻忌の会・四國五郎追悼の会

日時：2021年8月15日（日）14:00～16:00

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

☆ **1部：原民喜の作品朗読（広島花幻忌の会）**

桜隊―広島に散った俳優たち（文学資料保存の会ほか）

前半に原民喜の作品「碑銘」、「かけがえのないもの」、「永遠のみどり」などを**広島花幻忌の会**のメンバー（甥の原時彦さんも参加）がシタールの音色にのせて朗読。

後半は、**文学資料保存の会**ほか10人による「桜隊―広島に散った俳優たち」の朗読劇。劇団苦楽座は1945年4月、桜隊に改称。6月に広島に疎開し、中国地方の慰問公演を行う。8月6日の原爆被爆によりメンバー9人が亡くなり、その人たちを追悼する筋書き。

☆ **2部：講演「『暁の宇品』を執筆して」/講師・堀川惠子**

自己紹介

1969年広島県三原市生まれ。広島大学を卒業後、広島テレビに入社。報道記者として12年間勤めて退社し、東京在住のフリージャーナリストに。報道記者時代は原爆に関する取材を山ほどしたが、陸軍取材は1度しかない。広島を離れたからこそ、生まれ育った広島のことを考えてみたいと思うようになった。

原爆はなぜ広島に投下されたのか

人類初の原子爆弾の投下がなぜ広島だったのか疑問に思っていたが、10年以上前にアメリカ政府の原爆投下の「目標検討委員会」の記録を目にする。その理由は「軍隊の重要な乗船基地があるから」と書かれていた。それは海軍基地の呉ではなく、陸軍の港・宇品である。しかし、宇品は爆心地ではない。なぜ？ 宇品港に関心が深まっていく。

陸軍船舶司令部（太平洋戦争途中、「暁部隊」と呼称）の足跡をたどる

宇品の港を訪ねると旧陸軍桟橋の石積と宇品中央公園に小さな宇品凱旋館建設記念碑が残っているだけ。その碑には「陸軍中将　田尻昌次書」と刻まれていたが、調べてもどんな人かは分からなかった。

2010年以降、防衛省で陸軍船舶司令部の資料を読み、陸軍史勉強会にも参加。日清・日露戦争を経て、宇品地区が日本最大の輸送基地になっていく過程が分かる。また海軍ではなく、陸軍が兵士や物資を輸送する船を操ることになったのは、陸軍からの要請を海軍が断ったから。明治期の陸軍（長州）と海軍（薩摩）の対立も要因の一つ。海軍は戦艦ばかりに力を注ぎ、輸送船は平時は不要のため、陸軍の方で戦時のみ民間から船と船員を雇うことになった。

2019年、軍事史研究の大家との雑談の中で、「船舶の神」と呼ばれた田尻昌次中将を知り、「太平洋戦争の開戦に反対して首を切られたのではないか」という話を聞いた。この人を主人公にすれば、物語が書けるのではないかと思い、取材を始める。

田尻昌次司令官の未公開手記

2019年初冬、横浜のご遺族に面会する。田尻昌次の膨大な手記が残されており、自分の人生と共に暁部隊の誕生から終焉までが詳細に記されていた。

日清・日露戦争までは白兵戦や夜襲や突撃隊でよかったが、第一次世界大戦以降は産業革命を経て武器も近代化。戦車や飛行機や潜水艦も出現する「総力戦」となり、戦争の概念が大きく変わる。しかし、宇品周辺の装備は日露戦争時のままであった。そこに田尻中将が赴任し、金輪島を日本の舟艇開発の拠点にしたり、船舶工兵を創設したり、上陸作戦の近代化を図り「船舶の神」と呼ばれる。

無謀な戦争～輸送船の見地から

日中戦争が始まった時点で、船腹量は英国が 2.000 万総トン、米国が 1.200 万総トン、日本は 500 万総トンで英国の 4 分の 1、米国の 2 分の 1 以下であった。そのうち日中戦争に 180 万総トンが割かれ、民需用の船舶が不足すると石炭の輸送が減少。その結果、電力が不足し、工場の稼働率も低下し、物資不足となり、段々と国力が衰えていく。

もし新たな戦争を始めれば、戦う前から負けることが分かっており、田尻は反対を唱えた。1939 年 7 月、関係省庁に捨て身の意見具申をしたが、陸軍上層部に煙たがれ罷免される。

陸軍は田尻が作成した科学的データを都合よく改ざんし、圧倒的な船舶不足をごまかして、対米英開戦に踏み出そうとしている。

さらに日本が東南アジアに進出したことにより米国からの石油輸入がストップ。国内の石油の保有量が 1.5～2 年分となり、常識なら戦争を止めようとなるところが、石油が無くなる前に米英を叩けという理屈で 1941 年 12 月、太平洋戦争に突入する。

日本の輸送船は古船が多く、速度が遅い。日中戦争は戦場が近くまだ良かったが、太平洋全域となると目的地までたどり着くまでに潜水艦や飛行機から攻撃を受けて、海洋は「船の墓場」となる。武器や食料が断たれ、日本兵が餓死・病死したガダルカナル島の悲劇は起こるべくして起きた。

外された投下目標「宇品」

制海権を奪われ、瀬戸内海にも機雷がまかれ、暁部隊の任務は海上輸送から特攻隊の養成に移る。原爆の投下目標も宇品ではなく、市の中心地（T 字型の相生橋）となる。

被害の少なかった暁部隊は、佐伯文郎司令官の決断により市内の原爆被害の救援・救助に当たる。死者を荼毘にふせ、道路を片付け、市内電車を走らせ、鉄道も数日で開通させる。

忘れられた軍港宇品の記憶

市内から御幸橋を渡り、右手の宇品の入り口に日清戦争凱旋碑の大きな塔があるが、戦後 2 年目に「凱旋碑」の名前が「平和塔」に変えられている。戦争をした陸軍を悪としてその痕跡を取り除こうとした。**これは今の広島を象徴している。**

広島は被害のまちであると同時に加害のまちでもあったことを真摯に受け止めるべきである。戦争においては被害と加害は紙一重、当時日本も原爆を研究しており、もしアメリカより早く開発していれば、日本が他国に落としたかもしれない。

広島だからこそ核兵器廃絶を訴えることは大事だが、なぜ広島に原爆が落とされたかをも語る言葉を持たなくてはならない。栗原貞子さんの詩「**ヒロシマというとき**」が訴えているメッセージを忘れてはいけない。

旧陸軍被服支廠について

今話題の旧陸軍被服支廠倉庫も暁部隊の末端の組織のごく一部である。これを壊すと加害の歴史が記憶から消される。一部を残して保存するやり方は証拠づくりに過ぎず、真の姿を伝えることはできない。

その活用策として県民の集いの場にするのもいいが、被爆前の暁部隊の兵站基地の一部として加害の歴史を伝えるアイコンの役割を果たしてほしい。

質疑応答

・広島への原爆投下理由が「軍隊の重要な乗船基地があるから」という説は納得できない
→筆者の取材と分析に基づいた結論なので、それぞれが自分なりの考察をして欲しい。
・海軍には慎重派が多く、陸軍の方が開戦に積極的だったのでは？→一般的にそう思われていたが、海軍が積極的で、それに陸軍の一部が加勢したという最近の研究が有力。
・輸送船の船員の扱いについて→戦争中は資格を持つ高級船員以外は民間人扱いで、戦死しても遭難死扱いだった。戦後になって法律により救済され、軍属扱いになったが、申告制だったので、どれだけの人が救済されたかは不明。

コメント

これまで広島の加害の歴史は無視されていたように思う。旧陸軍輜重隊の被爆遺構も十分な検証もせず無残に撤去され、サッカー場が建設されようとしている。平和都市を謳うのであれば、加害の歴史もなおざりにすべきではない。　（編集委員　瀧口信二）

参考：暁の宇品―陸軍船舶司令官たちのヒロシマ　＊本書の本文・写真ともに「転載不可」
著者：堀川惠子　発行所：講談社　発行：2021 年 7 月 5 日

○“私と、私のまわりにいる人たち”のまちづくり

アーチスト　石原悠一

すでに作られた都市構造物と仕組みの中で私たちは生活している。今後数十年もの先まで都市計画があり、感度高く生活しているつもりでも、その計画を俯瞰しながら暮らしていくことは難しい。だから結局は、作られたもののうち自分に接点のある部分にだけ関わって生きていくことになるのだと思う。日々の生活には多くの制約があり、できることは限られる。だから私は、“私と、私のまわりにいる人たち”の範囲でまちづくりに関わりたいと思っている。

広島市街地にある袋町公園では、毎年 11 月に「大イノコ祭り」が行われている。広島を中心に中国地方と四国地方の一部で続けられている亥の子祭りが元になっていて、子孫繁栄や五穀豊穣、商売繁盛などを願う祭りである。

1990 年代に大イノコ祭りの原型となる祭りが何度か行われたが、資金難などを理由に途絶えたらしい。それから月日は過ぎ、10 年前に復活。１年目の「イノコ大福フェスタ」という名前は、２年目に「大イノコ祭り」に改名した。

大イノコ祭り

広島市中央部商店街振興組合連合会や NPO 法人セトラひろしま、社会福祉協議会、小学校の子ども会などのいろいろな団体や企業、有志の方々が大イノコ祭りを支える市民の会として運営に携わっている。それぞれが得意なことを持ち寄り、教え合ったり折り合いをつけたりしながら祭りを作り上げる。祭りに訪れる人々は、非日常の雰囲気のなかで飲食や娯楽を楽しみながら、同じ時間を過ごすことができる。

祭りは器である。手しごとや道徳観の伝承の場であり、地域の方々がゆるやかに交わって関係を築く場である。祭りには多種多様な人々が集い、地域のコミュニティを成熟させる良い機会になる。もちろん成果が表れるようになるには、子どもの成長を見守り喜べるような、お互いの老いを愛おしめるような年数が必要だ。

残念ながら大イノコ祭りはコロナ禍により昨年と今年は中止。来年の祭りは３年ぶりということになる。どのような人が集い、ゆるやかに交わっていくのか、とても楽しみである。

カンボジアに繋がりをいただいたのは 2014 年。小学生のころから漠然とカンボジアの教育や地雷撤去に関わりたいと思っていたので、長年の思いが少し実ったということになる。私はクメール語が全く話せないため、企画は「言葉のいらない交流会」として、孤児院や小学校の子どもたちに絵具や画用紙などの画材とサッカーボールを届けて交流した。

カンボジアでの活動

絵を描く活動では、画材の基本的な使い方や混色について学んだあと、自分の感情を抽象的に表現したり、心象風景を描いてもらったりした。そもそも画材が身近になく、初めて絵具を使う子どもばかり。絵具を混ぜて色が変わることに驚く純粋な反応は嬉しかった。サッカーの活動では、サッカーの基本練習に加えて、日本の体育の授業でも行われている体つくり運動なども取り入れている。

2017 年には、広島に所縁のある“ひろしまハウス”でも交流会を行うことができた。ひろしまハウスは、貧困家庭の児童を対象に無償で教育と給食の支援をしている施設である。私は、これからの社会を担う子どもたちには“身体性の伴った想像力”を育んでほしいと思う。自分を取り巻く環境を解釈し、より良い社会を創造していくことに繋がるからだ。

野外美術舎

私が比治山にアトリエを移して３年になる。広島市街地中心まで 10 分もあれば着いてしまうような立地で、自然も多く残っているのが魅力だ。そこで、“野外美術舎”という自然の中で絵を描く教室を、少人数制でのんびり進めている。自然の中で心を開き、感度を高めて環境と向き合い、世界を解釈していくのである。ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの提唱した環世界から、改めて世界を解釈していくのである。

私は、私のまわりにいる人たちと共にまちをつくっている。日々を丁寧に暮らしながら、お互いの“ありがとう”が届く範囲の人たちを大切にして活動を続けていきたいと思う。

○ *お知らせ：第３回広島市平和祭再現劇のご案内*

・テーマ：1949 年の第 3 回広島市平和祭を再現し、その意義を問う
・開催日：２０２１年１２月１８日（土）１３：３０～１７：００

第一部　第３回広島市平和祭再現をドラマとして実演　１３：３０～１５：１０

平和記念式典の前身である平和祭、昭和２４年８月６日に基町（旧護国神社前）市民広場で開催された平和祭を各登壇者からの挨拶・メッセージによって再現します。

この時、マッカーサー元帥（代理）や豪州軍の上官の出席や挨拶もあり。この年、広島平和記念都市建設法が制定され、平和記念公園の設計コンペの入選案が発表され、そのことも反映。また２代目の平和の鐘が設置され、この時初めて点打。

このような平和祭を可能な限り当時の挨拶・メッセージ等により再現します。

第二部　第３回広島市平和祭再現の意味・意義を問う討論会　１５：３０～１７：００

第一部に引き続き参加者の皆様と当時の平和祭の意味、意義を検討し、改めて平和祭・後の平和記念式典の在り方を検討・討論します。

・会　場：合人社ウェンディひと・まちプラザ　マルチメディアスタジオ（北棟６階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
・参加申込：広島諸事・地域再生研究所 電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com
・主　催：ピースグラント２０２１　実行委員会（代表　石丸紀興）

なお、本企画を成立させるために、この再現劇に先立って「*第３１回時代を語り建築を語る会*」を開催し、「**ヒロシマピースグラント２０２１企画／第３回広島市平和祭再現の試み―脚本案の検討と再現ドラマのリハーサル公開**」を実施します。ご観覧の上ご意見ください。

・会　場：合人社ウェンディひと・まちプラザ　研修室Ｂ（北棟５階）
・開催日：１２月３日（金）１８：００～２０：００

□ 編集後記

一人ひとりに物語がある

古くは広島が城下町になる江戸時代、幾たびの戦争と共にあった時代、そして被爆、着のみ着のままで必死に生きた時代は平和な世界へ向かう願いに燃えていた。それぞれの時代で私たち一人ひとりと家族の物語があり続けてきた。

今は、これらの物語をいつの間にか過去のこととし、今を楽しく軽やかに過ごすことのみを求めているとさえ感じているのは私だけではないだろう。このことは、避けることなくやってくる地球温暖化や日本の高齢化や少子化などの決定的な課題に対する計画的で段階的な具体策を意識できていないことに結びついている。

ここで一旦立ち止まり、過去を振り返り、希望の明日に向かう時代を想像してみよう。そこにはひとつながりの物語ができるはずである。ひろしまの特性を活かし、市民一人一人が安心してひろしまで暮らしている明日へ向かう物語を感じられないのならば、その物語を自分とつながる孫子に話せないのであるならば、**どこかに間違ったものや足りないものがあると考えたい**のである。

（編集委員　前岡智之）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　響け！平和の鐘実行委員会代表
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表